

50の
うん!
#7



かんこれ、始めました。編

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

「らのけん」ことじゅんなお話?

三郷学園高校「ライトノベル研究部」
——通称「らのけん」。

それは世にあふれるラノベを読みまく
り、また自らも書きまくり、総合的にラ
ノベへの造詣を深めることを目的とした
志しの高い部活動……のはず、なんだ
けれど……。アレ? 実際フタを開けて
みたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」
の魅力! という感じで展開するまつた
り系日常部活「コメティイ」なのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女
の子。その直情徑行さゆえに突っ走ってしまうことがある
のはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いの
ため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し
系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



赤城操

クールレビューイーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

それはあるうららかな日曜の午後のことだった。

——モンスター♪ モンスター♪ きみはモンスター・ペアレンツ♪ モンスター……

自宅でゆつたりとくつろいでいた華子^(はなこ)の耳に、軽快なスマホの着メロが響いた。

「あ、ひえちゃんからだ！ もしもしーし！」

着信画面にひえちゃん——水川英子^(ひかわえいこ)、華子の幼なじみにして、現在声優修行中の身——の名前を見つけた華子は、ウキウキしながら電話に出た。（※ひえちゃんについて詳しく知りたい方はG A文庫マガジン2014年9月合併号の「らのけん！ 2 夢の最終選考編」をご覧ください）

『あ、華子？ まんみー、送ってくれてありがとう！ 読んだよ！ めっちゃ面白かった！』

『うわあ～ありがとう。ひえちゃんにそう言つてもらうと嬉しさ倍増だよ～』

デビュー作を英子に褒められた華子は、頬を紅^(ほお)く染めてふにやふにやと身をよじらせ始めた。なにこの可愛い生き物、今度からドランクエで「ふしきなおどり」をするのは華子型のモンスターにしたい。

『特にスカンクガールが、食べたガールと食いしんボーアイを倒すシーンは最高だったね。もう電車の中だつたけどさ、声出して笑つちやつたよ～』

あ！あのシーンほかの読者さんにも好評なんだよ！ありがとう！」

「なんかさー」華子がそれで作家先生にならんたんね、でしみじみ思つやつたよ

よ。期末テスト前の中学生みたいだよ』

電話の向こうでふふふ、華子らしいなあ、という英子の楽しそうな囁きが聴こえた。

『あのさ、デジューでは先を超えてやつたナビゲーター、あたしもやつと専業になつてからの切土

事決まつたんだY.O.★ この前スタジオで声の収録してきたばかりなんだ★

華子は喜びのあまりスマホを取り落としそうになり、荒わてて待

「で、なに？ なに？ なんのアニメ？ 何の役？」

【あははは】期待を裏切
これって知ってる?』

かんざい これ ?

「あー、知つてる！ それこの前、部室で青山君がやつてた！ なんか今すこい流行つてるや

卷之三

『うん、そう、それそれ。あたしそれで【デングナー＆マンガナー】ってキヤラ演つてるから、

良から外で口にして聞いてみてれ」

『あははは、暇な時でいいよ』

「だってひえちゃんの初仕事でしょ？ あたし今すぐ聞きたいんだもん」
『うははは、うりごうう愛てるよ、華子』

このなごやかな会話が、のちにあのよつた悲劇を生むとは、この時は誰も想像だにしていなかつたのだった……。

「みんなさん、おばよみつばいめざす〜……」「は、華ちゃん!?」

「は、華ちゃん!?」

教室に入ってきた華子を見て、さとうかずやが小学校一年3組の生徒たちは戦慄した。
「可なせやう、こいつはげんきはつらう。一大なまけ者(おとなご)、アマ見る(わいさん)、すようすく。」

頬はこけ、目の周りはくまで真っ黒に落ち窪み、足許もおぼつかない様子で教壇に向かつた。

ている。その姿はさながら幽鬼のようであった。

「それではホームルームを始め……きゅうー」

「「「は、華ちゃん?!」」

その場にくずおれるように倒れた華子は、応急修理要員達（＝生徒達）によって迅速に保健室に運ばれたのであった……。



そして放課後のらのけん部室――。

「えー!? 徹夜でゲームやつてたー!?」

「はい……」

「若干呆れた様子の萌の前で華子はしょんぼり頷いた。

「なんでそんな無茶したのよ～華ちゃん?」

「華ちゃんってばそこまでゲーム一だったつけ？」

萌の後ろで文庫本を読んでいた一斗が、顔を上げて華子に訊いてくる。

「いいえ、あたし普段は全然ゲームとかしないんですけど、ひえちゃんが演つてるキラの声がどうしても聴きたくて、でも全然出こなくつて……」

華子がめそめそと涙目になる。

「それで徹夜しちゃったわけね～。へ～、でもすごいね。かんこれつて氷川先生が声演つてるキラがいるんだー」

「どれ、ちょっとスマホ貸してみ。関これなら、俺、相当やり込んでるから、どんなレアキラでもすぐ出してや……うおおおおお!」

華子からスマホを受け取つた一斗が驚愕に目を見開いた。

「どつたの、青やん?」

「サイデッカー・レベル99がいるじゃん！ これ、超レアキラじゃん！ あ！ ホウデツ

カーモレベル99でパーティー入つてる！ 俺この2体が揃つてるとこ初めて見た!!

一斗が鼻息も荒くスマホを操作し続ける。

「マジかよ!? 『ホナナ』も『チャウチャウちゃうん』も『モウカリマッカー』もいるじゃん！ 華ちゃんどんだけやり込んでんだよ!?」

「でもひえちゃんが声を演つてるキラだけが全然出こないんですよ～」

華子は部室のテーブルに顔を突っ伏したまま、じたばたと手足を動かした。

まるで甲羅ごと空中に持ち上げられた亀のようだ。

「はあ～、こんだけやり込んで出てこないキラつて一体何よ?」

「デンガナーチャンとマンガナーチャンですう～」

「は
?」

一斗がほかんとした表情になつた。

「……それって超ザコキャラじゃん？序盤でばんばん出てくる奴じゃん？」

でもでもでも全然出てこないんですううう!!

「そんな馬鹿な……あつ……」華子がまた手足をじたばたと動かす。まるで駄々つ子そのものである。

「そんな馬鹿が」と……あー……」

「どつたの、青やん？」

「この関これ、超絶課金コースになつてるじゃん……？」

ふえ?】

しかももう50万

「あの……超絶裸金口一icusつて……」

「最初にアプローチした時、訊かれたつしょ？」
無課金コリスにするか通常課金コリスにす

るか、超絶課金コースにするかつて」

「あ……なんか出てきた気はするんですけど……早くゲームやりたかったから……よく見ずに

押しちやつたかも…………です……

١٥٦

一斗が示したスマホのステータス画面には確かに「超絶課金コース」の表示があった。その下には「今月の使用金額合計は53万4千7百円でっせ、毎度おおきに！」という蚊文が確認できる。

——とどどどどどすれはいいんでしょか?」

「……………」
「……………」

アプリを削除してもつかい最初からやり直すしか……

あまりのショックに華子はその場にへなへなど座り込んでしまう。

…わかりました… しょうがないです じゃあ アプリを削除して…

一七二
と往來

「なにするんですかい、青山へーくん？」

らそいつらも消えちやうじyan!!』

「でもあたしはひえちゃんの声が聴きたいんですうー！」

そんなのだつたら俺のスマホでいくらでも聴かせてやるから、アプリ削除はやめよ？

「それじゃ意味がないんですー！　あたしがちゃんとプレイして、あたしがちゃんとデングナーチちゃんとマンガナーチちゃんを出して、それからきみんと声を聴きたいんですけどうー！」

ポケットからスマホを取り出して関これを起動しようとする一斗を、華子は全力でブロックする。

「華ちゃんもこう言つてゐるし、そつとさせてあげなよ。ね、青やん？」
「はあ……華ちゃん一回決めると頑固だからなあ……もつたいないなあ、ホウデツカー……」

萌にそう促され、一斗はため息混じりに自分のスマホをポケットにしまった。

華子がアプリ削除画面に閑これを呼び出した。
そして……。

「どったの、華ちゃん？」
そのままの姿勢で固まつてしまつた華子を萌が横から引き込む。

「あの……これ、アプリ削除したらお金が戻つてくるとか……ないですよね？」

「アプリ削除したら、もう全部消滅しちゃうんですよね……？」

「53万4千7百円……あたしのボーナス全部……今度の休みは台湾たいわんに遊びに行こうって思って」

たのに……思つてたのに……」
涙目でぶるぶる震え出す華子。やはり最後の最後で惜しくなつたようである。

「えええーい！ すべてはひえちやんのためなんだからー！！」
華子は意を決して、ぎゅっと目をつぶり、アブリの削除ボタンを押したのだった……。

その夜

「ひえちゃん、デンガナーチちゃんとマンガナーチちゃんの声聞いたよ～超可愛かったよ～」「あ、華子もうやつてくれたんだ！ ありがとう～」

〔失われた53万4千7百円〕の事を無理矢理忘れ、華子は努めて明るく振る舞つていた。

やっぱさ、まだ新米だからレアキャラとか全然演らせてもらえないんだよね、当たり前だけど」

「…………」「でもね、今にもっと力つけて、人気声優になつて、1万でも2万でも課金してゲットした
いつぐらいたいの魅力的なキャラ演れるようになるからね！見ててね、華子！」

「…………」

「華子？」
電話口で急に黙り込んでしまった華子に、英子は訝しげに呼びかける。

「…………」

「え、なになに？聞こえないよ？」

「ひえちゃんの声はもう十分魅力的だよ！あたし1万だつて2万だつて53万4千7百円だつて課金して全然いいぐらい、ひえちゃんの声は魅力的だと思うよ～～ああああああ～～～～～ごじゅうさんまんよんせんなんひやくえん～～～!!」

「え？ なに？ なんで泣くの華子？ 53万つてなに？ なんのこと？」

電話の向こうで突然号泣を始めた華子に、英子は戸惑うばかりだった……。

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- | | |
|----------------------------|---|
| G A 文庫マガジン 7月24日配信号・らのけん！ | |
| G A 文庫マガジン 9月合併配信号・らのけん！ | 2 |
| G A 文庫マガジン 10月27日配信号・らのけん！ | 3 |
| G A 文庫マガジン 11月27日配信号・らのけん！ | 4 |
| G A 文庫マガジン 12月25日配信号・らのけん！ | 5 |
- 夢の最終選考編
はじめてのおつか～～うちあわせ編
思い切って告白しちゃうぞ編
ペツト攻めたり編

★2015年

G A 文庫マガジン 1月22日配信号・らのけん！

6

はじめての発売日編